

熊本県下における連母音の融合状況

内 山 智 美

1 はじめに

〔ai〕、〔oi〕、〔ui〕、〔ei〕、〔ii〕 など、共通語～イに終わる連母音にあたる、九州各地の従来の方言について、『九州方言の基礎的研究』の記述^{注1}に従ってまとめると次の〈表1〉のようになる。

〈表1〉

連母音 タイプ	〔ai〕	〔oi〕	〔ui〕	〔ei〕	〔ii〕
A	(w)e:	(w)i:	(w)i:	i:	i:
B	(w)e:	(w)e:	(w)i:	e:	i:
C	ja:	(w)e:	(w)i:	e:	i:

A：豊前・豊後・日向・大隅（ただし、国東半島東部は〔e:〕、〔e:〕、〔i:〕、〔i:〕、〔i:〕というA Bの中間タイプ）

B：沓岐・対馬・筑前・筑後・肥後南部・薩摩・豊後南部海岸地帯・筑後境の鳥栖、伊万里、豊後近くの阿蘇郡、球磨郡、天草郡、屋久

C：肥前・肥後中北部、豆酸などの対馬の一部

つまり熊本県下における〔ai〕・〔ui〕・〔oi〕各連母音の融合形をまとめると

〔ai〕→〔e:〕 — 肥後南部、球磨郡、阿蘇郡、天草郡

→〔ja:〕 — 肥後中北部

〔ui〕→〔i:〕 — 県下全域

〔oi〕→〔e:〕 — 県下全域

となる。

同書・音韻分布図8「フルイ(飾)」^{注2}では熊本県下、老年層は、方言音〔i:〕が広く分布しているが、少年層では〔i:〕は天草に2地点、球磨に2地点分布するのみで融合形の衰退が著しい。その一方で、同書・文法分布図8「来い」では、老・少とも方言音〔e:〕一色である。秋山正次氏は連母音と融合音との関係について^{注3}同書で、

…〔ai〕の融合について）俚言臭が強いために、少年層ではある程度改められつつあ

るが、基本的には老年層と変わらない。^{注4}

と述べられている。

また、形容詞のカ語尾は、大体において肥筑・薩隅・沓岐の特色の1つとされ、熊本県下においても地域共通語（ただし阿蘇地方はイ語尾）として認識されているが、カ語尾とイ語尾との関係について、秋山氏は

…カ語尾は「県共通語」形としての品格と勢力を持った社会性の高いもの。イ語尾は家庭向き独自向きの情念性の強い、そしてやや古めかしい語形。…(中略)…したがって、フトカーフター、アブナカー アブニャー等の両形が併用^{注5}されている。

と示唆されている。

1960年代よりイ語尾の衰退とカ語尾の浸透が指摘され、現在では、熊本県下においては形容詞のカ語尾は固定した状況であると思われる。

ことばというものは一時たりともとどまるところなく常に移ろいゆくものである。方言においては、人口移動の増加、教育水準の向上、マスメディアの発達等により、共通語化が進み、方言が衰退傾向にあることがいわれて久しい。しかし、その流れが全てではなく、最近の研究によって、全国各地で共通語化とは異なる変化、若者の間で新たな地域差を生み出す変化が起きていることが確認されている。いわゆる「新方言」や“neo-dialect”とよばれるものなどである。

熊本県においても例外ではなく、吉岡泰夫氏は『暮らしに生きる熊本の方言』（1991・熊本日日新聞社）や「高校生のことばの特徴 — 獲得と消失 —」（1990・『日本語学』9-9）の中で、肥筑方言の特色の1つである形容詞のカ語尾が、連母音を含む形容詞の場合、特に熊本市の男子中高生では融合形を強調表現として好んで使用していることを報告されている。

本稿では、名詞・動詞・形容詞中の [ai]・[ui]・[oi] の3つの連母音の融合化について、地域差、性差、世代差を考えながら、実態を把握する。

2 調査内容

調査の内容については次の通りである。

調査地点 阿蘇郡阿蘇町・玉名市・熊本市・八代市・本渡市・水俣市・球磨郡良木町（以上93年調査）、玉名郡南関町・山鹿市（以上95年調査）

調査年月 1993年7～8月と1995年7月

調査方法 各世代、性別ごと2人1組で面接調査を行った。

調査対象者 基本的には各調査地点、60代・40代・高校生男女各2名ずつで、その地点の生え抜きの人を対象とし、外住歴は5年までとした。ただし、熊本市の高校生は男女各4名。また、南関町の60代と40代は調査を行っていない。調査対象者総数108名。

調査項目 悔い 虫喰い 職員 得意 吸い物 西瓜 水泳^{ついたり} 一日 縫い目

むいか 六日 注意 衣類 親類 手ぬぐい 貝 境目 ～回 階段 買いもの
 鯛 ～才 退屈 反対側 茶色 ～以内 住まい ～枚 茶色 もらい
 泣き 笑い者 甘藷(カライモ) ～位 祝い 願いごと 災害 間違
 い 放し飼い お互い様 台所 大根 兄弟 手伝い ～倍 按配 横
 這い 間 手伝い 困い 小石 つきそい 里芋 砥石 一息 足手ま
 とい 問い合わせ 保育園 思い出 二日酔い 勢揃い 白糸 羽子板
 川沿い 青色 顔色 勢い すすいだ 注いだ 抜いた くつついた
 なつuit かつuit 追uit 脱uit 吹uit 向uit 傾uit
 うずuit 気づuit うなずuit 近づuit つまづuit 書uit 嗅
 いた 咲uit 炊uit つないだ 泣uit 履uit はいだ 巻uit
 ほざuit はしゃuit 焼uit 漕uit 掃uit(ハウイタ) 沸uit
 さばuit 解uit 届uit ほどuit 置uit 退uit(ドイタ) 動uit
 た 驚uit 低い ぬくい 四角い 見にくい 安い 薄い きつい
 ずるがしこい(コスイ) ごつい 暑い がめつい 寒い 煙い 眠い
 悪い 軽い だるい 古い 丸い まずい 渋い 鈍い 高い 短い
 赤い 温かい 近い 小さい 浅い 眠たい 痛い 固い 冷たい め
 でたい くすぐったい もったいない 少ない みっともない 仕方が
 ない(シオンナイ) うまい 狭い 甘い 早い 辛い 暗い 荒い 恐
 い 弱い 長い 苦い 酸っぱい しょっぱい しつこい 面白い 遅
 い 細い 遠い 太い 重い 強い 黒い 白い 広い のろい むご
 い すごい 鈍い 飽きっぽい 怒りっぽい 青い (95年調査では、
 さらに「浮いた」「急いだ」を追加した。)

3-1 各品詞における連母音の融合状況

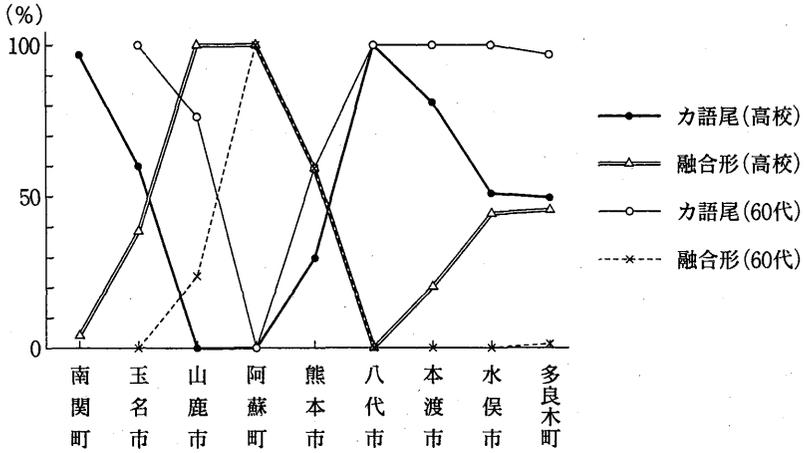
各品詞における [ai]・[ui]・[oi]の連母音の融合率を、世代・性別ごとにまとめると次の
 <表2> のとおりとなる。

<表2>

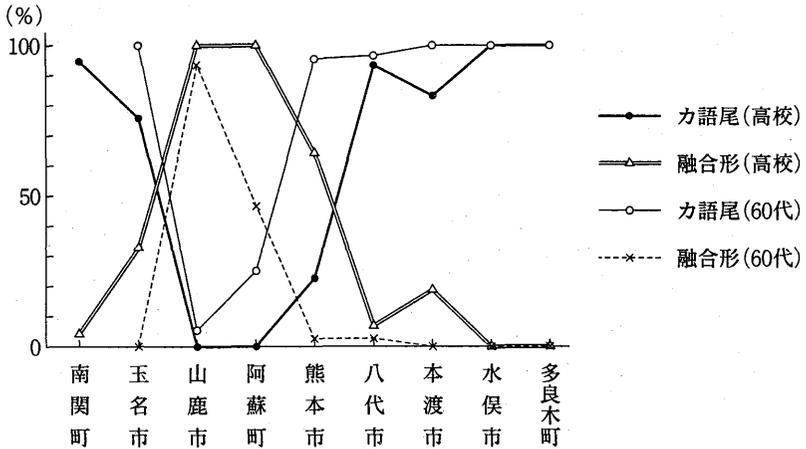
	名 詞		動 詞		形 容 詞	
	融 合 率	非融合率	融 合 率	非融合率	融 合 率	非融合率
60代・男	10.6	89.4	42.3	57.7	18.7	81.3
60代・女	0.6	99.4	39.2	60.8	14.0	86.0
40代・男	8.0	92.0	30.6	69.4	25.8	74.2
40代・女	5.5	94.5	6.2	93.8	10.0	90.0
高校・男	0.4	99.6	1.5	98.5	39.9	60.1
高校・女	0.0	100.0	0.6	99.4	47.7	52.3

(%)

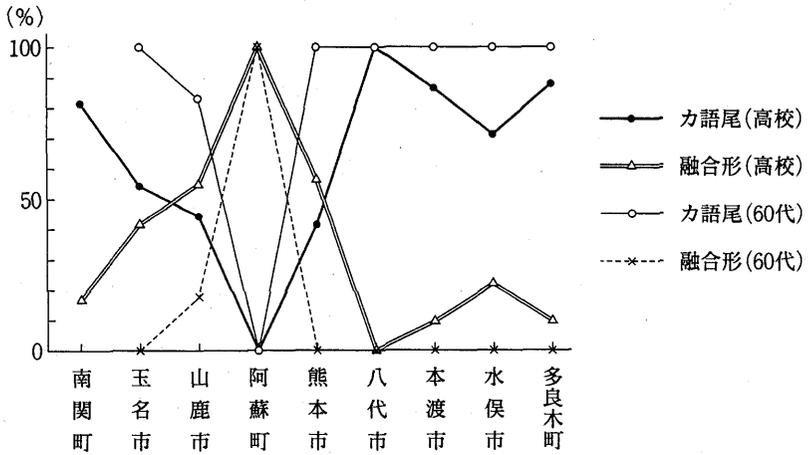
<グラフ1> [ai]連母音形容詞 (男)



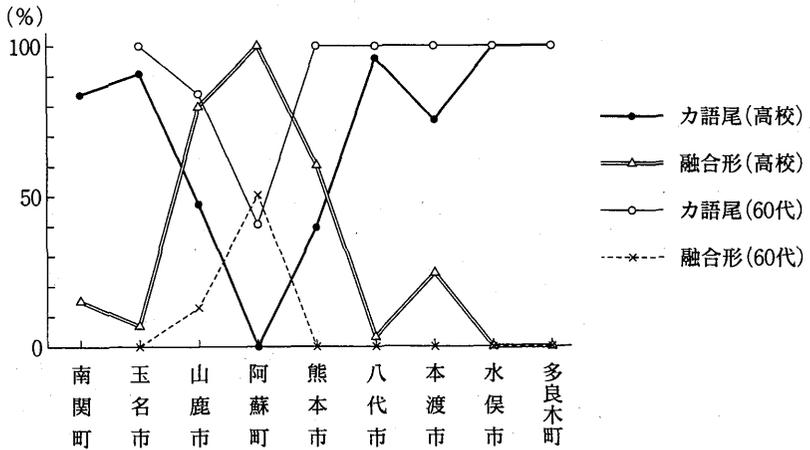
<グラフ2> [ai]連母音形容詞 (女)



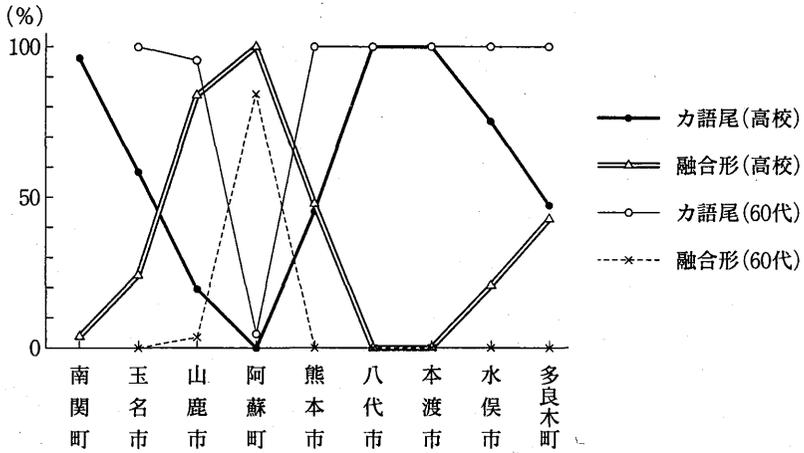
<グラフ3> [ui]連母音形容詞 (男)



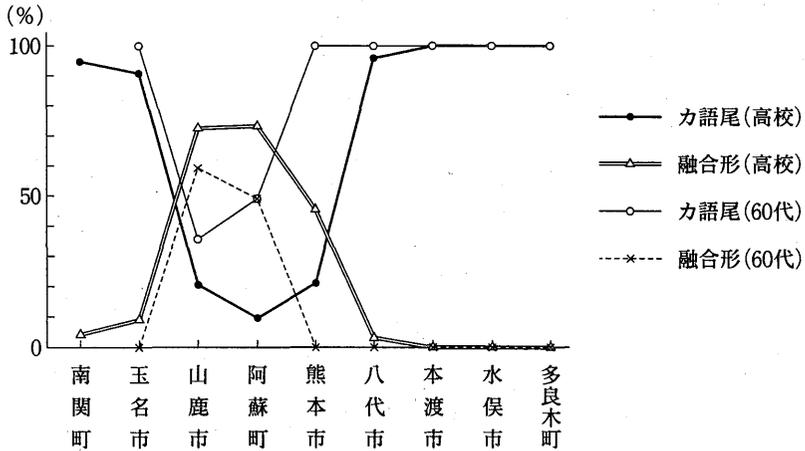
<グラフ4> [ui]連母音形容詞 (女)



<グラフ5> [oi]連母音形容詞 (男)



<グラフ6> [oi]連母音形容詞 (女)



まず、融合率と各品詞との関係において、各世代または男女ともに共通していることは、名詞では融合化しにくいことがあげられる。特に高校生では、名詞中の連母音の融合化はまず起きない。最も高い60代男性でも10%程度であり、また、40代女性では3品詞いずれも融合率が10%以下と低いことから、融合化がかなり衰退してきていることがうかがえる。

動詞・形容詞の各融合率より世代及び性別が、次のⅠ・Ⅱに分類できる。(40代女性は3品詞とも平均的に低率であるので分類よりのぞく)

Ⅰ 60代男・女、40代男…動詞>形容詞

Ⅱ 高校男・女 …形容詞>動詞

Ⅰは、形容詞よりも動詞中の連母音の融合化が高いという特徴を持つが、これは前の〈グラフ1～6〉の、60代男・女におけるカ語尾と融合形、それぞれの出現率を比較すると、熊本県下(阿蘇町をのぞく)の老年層では、カ語尾が固定しているために形容詞中の連母音の融合化が抑えられていることがわかる。これに対しⅡすなわち高校生の場合、各連母音の差はあるものの、カ語尾は60代と比較すると出現率が低下した分、融合形の出現率が高くなっている。

また、いわゆる新方言の場合、文体的に低く、改まった場面で使いにくいことから、圧倒的に男性の方に使用度が高いことが指摘されている。^{注6}

しかし本調査中の高校生における形容詞中連母音の融合化は、友人や家庭の中だけで、目上の人や改まった場面で使用することはないというインフォーマントがほとんどである。にもかかわらず〈表2〉の高校女性の場合、男性よりも融合率が高い点は興味深い。

3-2 熊本県下高校生における [ai]・[ui]・[oi] 連母音の融合状況

3-1で、高校生においては、動詞(あるいは名詞)よりも形容詞中の連母音の融合化が起こりやすいことを述べた。形容詞と動詞との相違点について、森田良行氏は

形容詞は、対象に対する話し手の主観的な認知・判断による言表である。^{注7}

と述べられ

動詞は表わされた対象自体の中における変化・作用ゆえ、これは話し手の外側のことであり、客観的把握しかできない。

と示唆されている。つまり形容詞から動詞、さらに名詞へと進むにつれて、話者の個人性・主観性・相対性といったものは低くなっていく。他人との親密なつながりを持つために、ときには、故意的に方言が使用される今日において、カ語尾が県内共通語として広く使用されている中、高校生にとって形容詞中の連母音を融合化することは、新鮮であり、かつ独自性を有するという点で最適なであろう。

〈グラフ1～6〉より、カ語尾率と融合率が接近もしくは、逆転する地点は、基本的には男女とも、山鹿市・阿蘇町・熊本市の3地点である。しかし〈グラフ1〉の [ai] 連母音の男性においては、カ語尾率と融合率が逆転している地点が急増し、6地点である。

〈表3〉とも合わせて見ると、八代市と南関町ではほぼカ語尾のみ使用であるが、他地点では最低でも本渡市の19.5%であとは全て45%以上と融合率としては高い。また女性の場合、〈グラフ2・4・6〉からは読み取りにくいのが、各連母音ごとの平均融合率は、〔ai〕——34.5%、〔ui〕——31.1%、〔oi〕——25.1%でそれほど大きな差はないが、やはり〔ai〕連母音の融合率が最も高い。調音位置よりこの3連母音を考えると、〔ai〕は〔a〕が広母音であるのに対し、〔i〕は狭母音と、〔ai〕は対蹠的な音の連続である。これに対し、〔ui〕はともに狭母音、〔oi〕も〔ai〕に比べると、2つの音の調音位置は近い。したがって〔ai〕連母音が最も融合化しやすいのは、こうした労力軽減の動きがあるのではないかと考えられる。

次に融合形の種類と地点差について、〈グラフ1～6〉と〈表3〉より考察する。〔ui〕→〔i:]へ、〔oi:]→〔e:]へと〔ui〕・〔oi〕連母音に関しては、基本的にはどの地点も従来の方言音を復活させている。熊本市では、〔ja:]が〔ui〕・〔oi〕の融合形として、また〔ui〕→〔e:]、〔oi〕→〔i:]の融合化がみられるが、いずれも非常に低率であるので、個人的・例外的なものであろう。

〈表3〉

	〔ai〕	〔ui〕	〔oi〕	
男性	〔ja:] 熊本市 51.5%	〔i:] 熊本市 53.8%	〔e:] 熊本市 38.2%	
	阿蘇町 48.0%	阿蘇町 100%	阿蘇町 88.0%	
	山鹿市 94.5%	山鹿市 52.4%	山鹿市 84.0%	
	南関町 1.8%	南関町 17.5%	南関町 2.4%	
	〔e:] 熊本市 15.2%	玉名市 44.8%	玉名市 25.4%	
	阿蘇町 52.1%	八代市 3.7%	八代市 8.4%	
	山鹿市 5.5%	本渡市 10.3%	水俣市 26.5%	
	玉名市 45.8%	水俣市 21.2%	多良木町 45.8%	
	水俣市 44.9%	多良木町 10.3%	〔ja:] 熊本市 6.4%	
	本渡市 19.5%	〔ja:] 熊本市 1.6%	〔i:] 熊本市 4.1%	
	多良木町 45.8%	〔e:] 熊本市 1.2%	山鹿市 4.1%	
	女性	〔ja:] 熊本市 30.9%	〔i:] 熊本市 62.5%	〔e:] 熊本市 38.8%
		阿蘇町 7.0%	阿蘇町 98.1%	阿蘇町 79.1%
山鹿市 94.2%		山鹿市 80.9%	山鹿市 74.6%	
南関町 5.5%		玉名市 5.6%	南関町 2.4%	
〔e:] 熊本市 34.5%		本渡市 23.3%	玉名市 9.8%	
阿蘇町 92.5%		八代市 5.7%	八代市 7.7%	
山鹿市 5.8%		南関町 15.0%	〔i:] 熊本市 3.0%	
玉名市 19.5%		〔e:] 熊本市 3.3%	山鹿市 4.6%	
八代市 4.1%			〔ja:] 熊本市 11.6%	
本渡市 16.2%				

〔ai〕連母音の場合、融合形の種類及びその地点をまとめると、次のようになる。

〔ai〕→〔ja:〕 熊本市 山鹿市 阿蘇町 南関町

〔ai〕→〔e:〕 熊本市 阿蘇町 山鹿市 玉名市 八代市 本渡市 多良木町

熊本市の場合、融合化が盛んで、60代と比較するとカ語尾の衰退が著しい。男性の場合、従来の方言音である〔ja:〕の使用率は51.5%とよく温存しているのに対し、女性では〔ja:〕の「方言臭さ」を嫌ってか、本来阿蘇郡、天草南部、球磨郡の方言音である〔e:〕を使用し、その使用率は34.5%と、〔ja:〕と拮抗するほどの状況となっている。これは、連母音を持つ形容詞の場合、カ語尾よりも融合形を使用することが今日的という感覚を取り入れながらも〔ja:〕という音の方言臭さ、あるいは同世代では男性が頻用しているため、〔ja:〕を退け、〔e:〕を新しく取り入れたのではないと思われる。また若者が新たに生み出した方言の新形式の場合、圧倒的に男性が使用すると指摘が多いが、熊本市の場合、〔ai〕連母音の融合率は男性66.7%、女性65.4%、さらに、高校生全体における、3連母音平均融合率は、男性39.9%、女性47.7%とむしろ女性の融合率が高い。これは形容詞中の連母音の融合化が高校生にかなり浸透していることの表れといえないだろうか。

また阿蘇町では〈グラフ1～6〉までより、60代では従来通り形容詞はイ語尾であることを温存している。高校生においても原則的にはこの傾向が受け継がれているが、〔ai〕連母音では男女とも熊本北中部式の〔ja:〕が出現し、特に男性においては、48.0%と〔e:〕と拮抗する状況である。熊本市以外の地点でも、地域共通語形であるカ語尾を抑えて融合形を使用する傾向が徐々に広まっているが、阿蘇町でもまた、新しい融合形の進出という形で影響を受けているといえるだろう。

4 まとめ

以上、熊本県下における連母音の融合状況を、品質・世代・性差を考慮しつつ述べてきた。

3世代とも名詞の融合率が低いという点では、秋山氏が示唆されるような、連母音の融合化には「家族向き独自向きの情念性の強い」性格がうかがえるが、融合率より、60代・40代と高校生では融合状況が異なる。

60代・40代の場合、融合化は女性よりも男性の方が起こりやすく、また形容詞の場合、地域共通語形であるカ語尾の勢力が強いため、動詞の方が融合化しやすい。なお融合形は、従来の方言音を温存している。従って、60・40代の連母音の融合化は古方言の残存と考えられる。

それに対し、高校生の場合、名詞・動詞の融合率は極端に低く、まず融合化は生じないが、形容詞では、地点によって差はあるものの、県内では、強い勢力を持つカ語尾が衰退し、融合形の台頭が、特に熊本市及び調査地点中熊本市に最も近い山鹿市で著しい。〔ai〕連母音において、熊本市男性の場合、従来の方言音である〔ja:〕が非常によく用いられているが、女性では本来阿蘇郡・天草南部・球磨郡南部に分布する〔e:〕を取り入れ、

その出現率は〔ja:〕よりもわずかではあるが高い。これによって〔ai〕連母音の融合率は男女ともほぼ同率となっている。県内では形容詞のカ語尾が圧倒的に使用されていたのが、連母音を含む語では融合形を使用するという新しい傾向が生まれ、それを受け入れながらも、自らによりふさわしいと思われる音を選択したのではないか。女性このような積極的な姿勢は高校生全体における、形容詞の平均融合率にも反映され、男性よりも女性の方が高率である。これは形容詞中の連母音の融合化がかなり定着してきたことの表われであろう。

高校生において、形容詞の表現形式の一部を連母音の融合形が、地域共通語形として担いつつあるという新しい傾向を今後更に調査地点を増やししながら、その動態を検討したい。

注1 『九州方言の基礎的研究 改訂版』「九州方言の総括的概説 262 音韻」

注2 『九州方言の基礎的研究 改訂版』「233 音韻分布図」

注3 『九州方言の基礎的研究 改訂版』「234 文法分布図」

注4・5 『九州方言の基礎的研究 改訂版』「九州方言の各県別概説 256 熊本」

注6 『社会言語学』真田信治著「第2章 属性とことば」

注7 『講座日本語教育』森田良行著 第四分冊 「動作状態を表わす言い方」

(1968)早稲田大学語学教育研究所編

(参考文献)

『九州方言の基礎的研究 改訂版』(1991)九州方言学会 風間書房

『講座方言学9 九州地方の方言』(1985)編集委員飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一
国書刊行会

『暮らしに生きる熊本の方言』(1991)秋山正次・吉岡泰夫 熊本日日新聞社

『新・方言学を学ぶ人のために』(1991)徳川宗賢・真田信治(編) 世界思想社

『社会言語学』(1992)真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹著 桜楓社

「高校生のことばの特徴—獲得と消失—」(1990)『日本語学』9-4 吉岡泰夫 明治書院

「連載=若者語イノベーション①~⑫」(1992~3)『言語』吉岡泰夫 大修館書店